

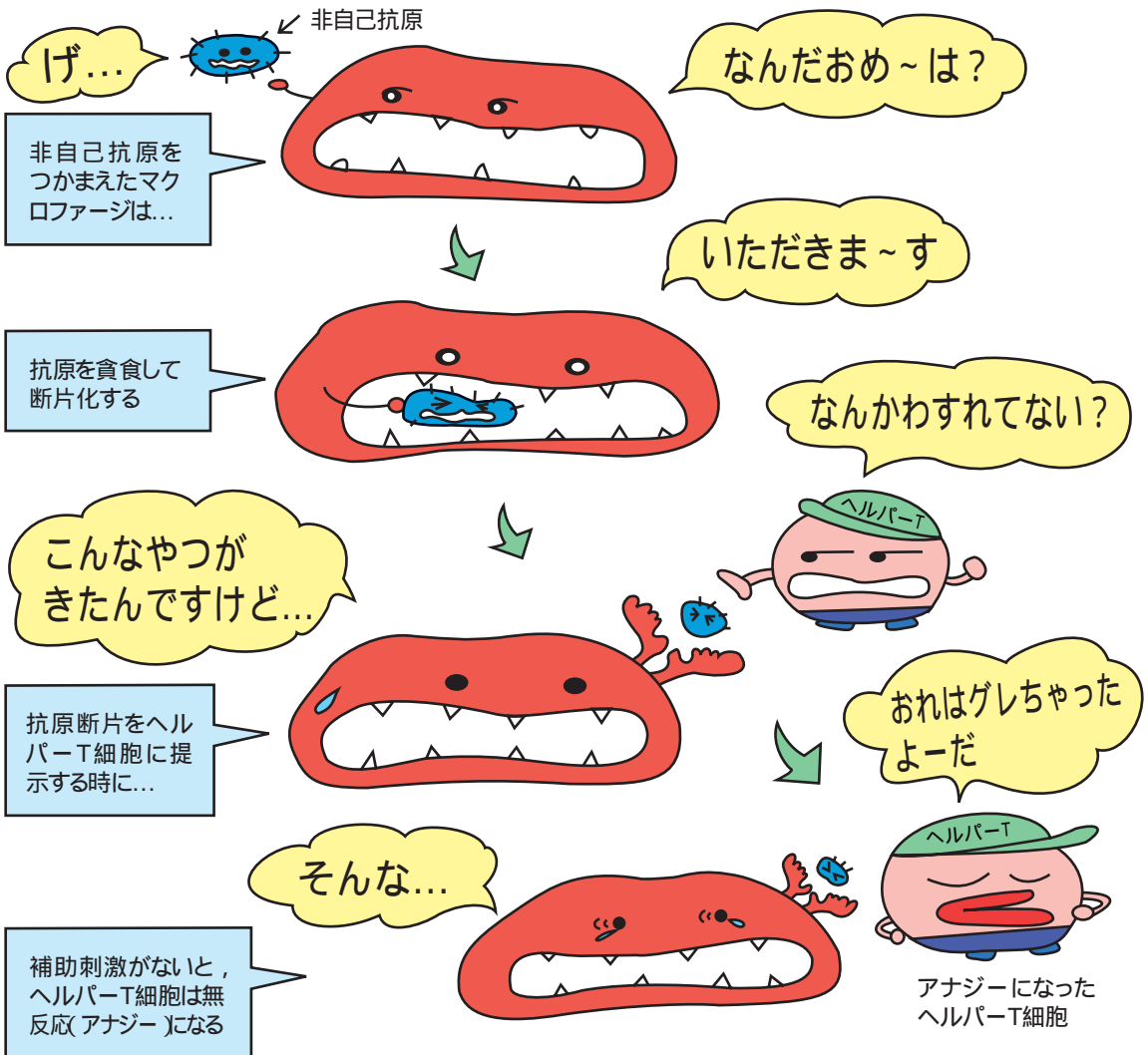
応用編 その6 .

すねる細胞 泣きさけぶ分子

萩原 清文\* 作

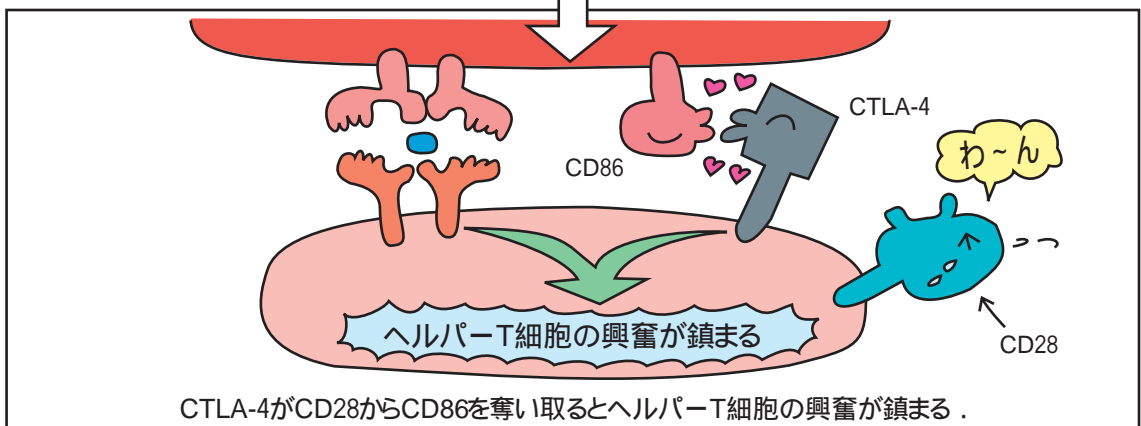
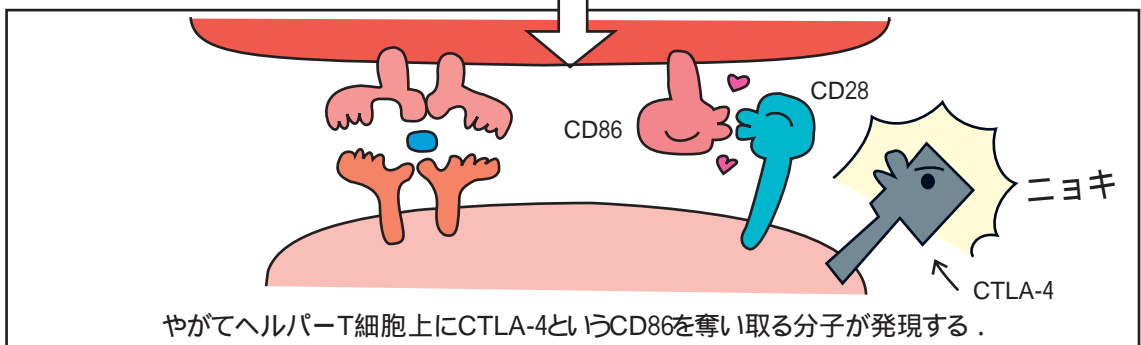
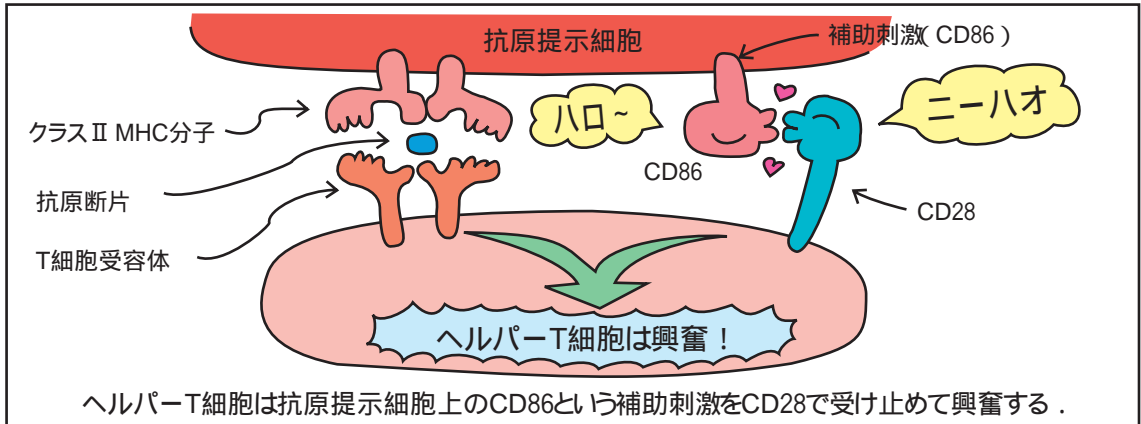
多田 富雄\*\* 監修

生命現象は一コマ一コマがドラマチックで感動的であるが、免疫反応の総司令官であるヘルパーT細胞の働きぶりもダイナミックである。戦うべき異物(非自己抗原)が侵入すると、マクロファージやB細胞がこれをとらえて貪食し、断片をヘルパーT細胞に提示するわけだが、ヘルパーT細胞はそう簡単には興奮しない。親愛の握手、ないしキスのような刺激(補助刺激)がないと、かえってグレて反応してくれなくなるのである(アナジー)。



\* 東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科  
\*\* 東京大学名誉教授

ここまでは「マンガ免疫学」シリーズの復習であるが、ここからがすごいことがわかってきた。補助刺激という親愛のキスをもらって興奮したヘルパーT細胞の細胞表面上には、やがて親愛のキスを奪い取る分子(CTLA-4)が発現し、最終的にヘルパーT細胞の興奮は鎮まるのである。



細胞がすねたり、分子がキスを奪いあったりと...まさにドラマそのものではないか!